京ちゃんとの出会い

人工呼吸器を付けながら地元の小学校(普通学級)に通う林京香ちゃんについて、このレポートでも何回か紹介してきた。先日の「障害のある子の就学講演会 2014」に参加して、ますます京ちゃんについて書いてみたくなった。京ちゃんと出会って 1 年余り経つが、すこし振り返ってみたい。

京ちゃんとの最初の「出会い」は、写真にあるように昨年 7 月 18 日の中日新聞朝刊の記事であった。「思いやりなき本音」という見出しの特集「不安に踊る　2013 参院選」で、京ちゃんのことが紹介されていた。ネット社会の思いやりなき暴言、差別発言に正直腹が立った。現代日本社会の重要な問題であると考え、コピーして学生に配り感想を求め、ゼミなどの場で議論した。

思いやりなき本音

不安に踊る 2013参院選 3

ある女の子をめぐるインターネットの掲示板が今月、また新しくなった。書き込みは千回ごとに一枚更新され、これで三十六枚目になる。

女の子は、生まれつき全身の筋肉が萎縮する難病を患う「京ちゃん」こと名古屋市瑞穂区の林京香さん(八)。同市では初めて人工呼吸器を付けながら健常児と同じ公立小学校に通っている二年生だ。

掲示板は頑張り屋の京ちゃんや父智宏さん(三七)、母有香さん(三七)を励ますため、ではない。「親の自己満足」「普通の子ごっこをしたいだけ」。並ぶのは三人への罵詈雑言だ。

掲示板ができたのは東日本大震災から半年が過ぎた二〇一一年十月。両親が京ちゃんの普通学級進学を河村たかし名古屋市長に要望したニュースが新聞、テレビで報じられたのがきっかけだった。

書き込みは、すべて匿名で、文面から察するに障害児の親といった境遇が似通った人たちでもない。

母有香さんは「いったい、どんな人がと思うと怖い。心が疲れちゃって、夫婦同士で、ささいなことでケンカになることも増えた」と打ち明ける。

他者への思慮にかけた暴言の類いは昔からあった。が、東北大文学部教授(社会心理学)の大渕憲一さんは「ネットの普及によって表現形態が変化しているのでは」と話す。本来は隠すべき、恨みや憎しみ、ねたみといった負の感情が、反撃の恐れがないネットという手段で容易かつストレートに表出されるというわけだ。

「みんな将来のこととか不満がたまってんだろうね。芸人から政治家まで、

友だちとパンの生地をこねて遊ぶ京香さん(中)。母親の有香さん(右)は、ネット上の中傷に「どんな人がと思うと怖い」と話す＝名古屋市瑞穂区で

記事にもあるが、当時、橋下大阪市長が従軍慰安婦について、「当時(戦時中)は、必要だった」などと語り大きな問題になった。最近はとりわけ「ヘイトスピーチ」が社会問題になっている。刺激的主張がネットで加速している。

記事で忘れられないのが、京ちゃんのことだ。写真にはない、最後のところを書いておきたい。「京ちゃんの母有香さんは先日、体育の授業を見学して胸が熱くなった。ドッジボールで外野を務めた京ちゃん。同級生たちはボールが当たりそうになると前に立って守り、京ちゃんが厚紙に傾斜を付けてボールを転がす姿を『かっこいい』とほめてくれた。感情をむき出しにしがちな子供たちだって相手を思いやるすべは知っている。手本となるべき大人たちは---。とがった言葉が飛び交うこの国で、参院選の舌戦が最終盤を迎えている。」

記事を書き写していて、京ちゃんと級友たちのことが、いまも心に迫ってくる。明日、衆院選が公示される。

(2014 年 12 月 1 日)